読むくすり箱
第126号
平成14年5月
富山県病院薬剤師会
DI委員会

# 「かぜ」と「漢方薬」

**漢方治療の基本は「証」に随って治療することです。**

**「証」とは**

患者様の主訴や症状を漢方独自の立場で体質や症状にまとめたものです。「証」が決まれば漢方薬も決まります。「証」を把握するための漢方診断法として四診および陰・陽があります。

※詳しくは“読むくすり箱 第95号”「漢方はどんな薬」を参照してください。

ところで、かぜには葛根湯？とは限りません。症状・病態に応じて服用する漢方薬も異なります。そのいくつかを紹介します。

## 急性期

かぜの初期(1～2日)、発熱、頭痛、悪寒、鼻炎、咽頭炎があるとき。

**●葛根湯**
発汗を目的とします。

**●小青竜湯**
鼻水、くしゃみ、閉鼻が主症状のとき。

その他、症状・病態に応じて麻黄附子細辛湯、桂枝湯など用いられます。

## 亜急性期

熱が上下して悪寒と発熱が交互にくる(午後に微熱)、口が苦い、食欲低下などがあるとき。

**●小柴胡湯**
この時期、一般的に使用される漢方薬。

**●柴胡桂枝乾姜湯**
胃腸虚弱、やせ型で微熱、倦怠感があるとき。

また、発熱、倦怠感がなくなり咳があるときに用いる漢方薬として、

**●小青竜湯**
咳、鼻水、水様喀痰など。

**●麦門冬湯**
痰の切れにくい咳、咽頭がむずむずして咳込み、喀痰がないとき。

## 回復期

解熱して症状は軽くなったのに倦怠感が強いとき。

**●補中益気湯、真武湯**
回復促進のために使用します。

かぜの漢方薬は熱い湯に溶かして服用すると効果的です。

**なお、漢方薬が不適な場合があります。**
**かぜをひいたら無理をしないこと、安静にしていること、病院で診察を受け症状に応じた薬を指示通りに服用することが大切です。**